



TITLE:

<トピックス>インドネシア紀行

AUTHOR(S):

高山, 鐵朗

CITATION:

高山, 鐵朗. <トピックス>インドネシア紀行. 技術室報告 2009, 10: 70-71

ISSUE DATE:

2009-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/233399>

RIGHT:

インドネシア紀行

観測班（火山活動研究センター）高山 鐵朗

2008 年 12 月上旬に在職中 3 回目のインドネシア渡航の機会をいただいたので報告する。今回の目的は“火山災害評価のための火山噴火のモデル化に関するアジア国際シンポジウム”という会議への参加であった。メンバーは京大からは石原和弘防災研所長，井口准教授，2 名の研究者と著者を含めた計 6 名からなり，震研から中田節也教授を中心に数名，その他は北大，東北大，名大，日大，九大，気象庁など将来日本の火山学会を担う若手火山研究者の面々で構成され，勿論インドネシアからは多くの火山学者・研究者が参加し，フランスなどからの参加者もあった。メイン会場はバンドンの“地質学院”の講堂で最近まで“VSI”の名称で親しまれた国の機関であった。

11 月 30 日午前 7 時に鹿児島空港について福岡空港まで約 30 分のフライトの後，出国ラッシュに遭遇したようで，手荷物を預けて出国するまで 1 時間余りの時間を費やした。免税店でインドネシアの友人のため“ハイライト”を買い，定刻にソウルのチャンギ空港へ 1.5 時間のフライトとなった。国際線は時間を問わずに軽食が準備されている。航空会社によって大きな違いがあるが，今回利用の大韓航空は良好の方で 11 時には早めの昼食が出され，飲み物の注文は勿論 Beer である。良い気分になる頃には眼下に朝鮮半島を見ながら，ソウルからは数十 Km 離れているチャンギ空港が見えてくる。チャンギ空港はこの 6 月にも来ていたので，迷うことなく次のジャカルタ便へのゲートに着くが 2.5 時間待ちは永い。再び大韓航空でのジャカルタまでの飛行時間は 6 時間余りだけど，2 時間くらいは時間経過は早いがそれ以降は暗くて外も見えないし寝て過ごすしかない。時差 2 時間のジャカルタには定刻に着き，迎えの人（JICA 研修生）とも合流できて，その後車で約 3 時間近く移動して目的地のバンドンのホテルに着いたのは午前 1 時過ぎで，なんと自宅を出発してから 22 時間経過していた。

バンドン初日午前はシンポジウムに参加したが，これまで送り出した JICA 研修生達と懐かしい再会で，中には 9 月まで桜島に居たアグスさんも快く迎えてくれた。午後からは近くの博物館などで時間をつぶし，夕食を兼ねたパーティーはバンドンを見下ろす高台であったが，残念ながら雨季のため夜景は楽しめなかったが料理をはじめインドネシア Beer も美味しく頂けた。

2 日目は VSI の部長さん（京大マスター卒）がグントール火山視察を計画してくれて，同じ京大マスター卒で研究者の Estoさんを案内役に付けてくれた。グントール火山はバンドンから南東へ約 50km の所で途中は高速の後大きな峠（日本だったら一番にトンネルで結ばれるであろう主要道）を越えたガルトの街にある火山で，山は大きな丘というイメージで 14 年前から記憶にあったので，離れたところからもはっきりと「アッ，グントールだ」とすぐにわかった。

火口は 2.5 時間登山しなければ見えないので今回は観測所訪問だけにした。迎えてくれたアデさんは 14 年前にも居たスタッフで私のことを覚えていてくれ，こちらもなんとなく面影を思い出す事ができた。観測所は当時からすると広く綺麗になり観測システムも Win システムが導入され GT ビューに表示される波形は穏やかな火山の印象であった。14 年前に 3 箇所設置した地震観測点はそのうちの 1 箇所が盗難にあい，全てなくなったようであるが 2 観測

点は現在でも使用されていたので何となく安心した感じであった。また、地震予知センターと共同で設置した傾斜計も稼動中で、観測点写真には園田保美技術員の姿もあった。制限された時間の中で欲張ってしまい、観測所から一時間で行けるパパンライアン火山へ行くことにした。大雨の中を山頂に近い駐車場まで行ったが、大粒の雨には身動きがとれずに火口壁を下から眺めるだけの見学になり、そのままバンドンまで引き返すことにした。

3・4 日目は巡検の日である。午前 4 時半にホテルをチェックアウトしてバンドン空港には 6 時前に着いた。20 数名の団体移動だから世話をしてくれる VSI のスタッフも大変だ。空路 1 時間でスラバヤ空港に到着したがそこにも先回りした VSI のスタッフが待っていて、バスに乗るまで行き届いた世話をしてくれ頭の下がる思いだった。この朝の朝食はホテルが準備した物、機内食、バスに準備してあったものと 3 食の朝飯に皆さん「どうなっているの...？」であった。

バスで 3 時間のながい旅も今回の最大の目的であるケルト火山に着くと不思議と疲れも感じない。「トンネルを抜けるとそこには溶岩ドーム（写真 1）がそびえていた」の文句がぴったりの風景が飛び込んできた。2007 年 11 月に湖の中心から突然溶岩ドームが現れ 4・5 日で 100m 近い高さに成長した。日本から来た研究者の中には「この溶岩ドームを見たいがために来たんだ」と言う人もいるくらいで、著者も唖然として眺め入ることであった。研究的な、あるいは数字的な記述は避けるが、遠くから眺める雲仙普賢岳のドームに比べ、手にとって暖かい溶岩の感触を感じ取れると言うことでしかできない貴重な経験は在職中で最後の感動ものであった。その後はケルト火山観測所を見学したが、なんと敷地内には今回は是非食べねばならない“ドリアンの木が・・・”。そして枝にはまさしくドリアンがぶら下がっている。早速スタッフに食べたいと言ったら「ダメ！！」と怒られた。が、木になっている物はまだ熟してないから食べられないということだったようで、ちゃんと熟した物（写真 2）が準備されていてはしゃいで食べるものだった。従って観測所の施設については報告する内容をほとんど持たないが、周囲をパップル畑に囲まれた眺望のきく美しい観測所であった。

5 日目は最後の巡検地であるスラバヤ空港に近いシドアルジョのマッド火山（泥を噴出している）に行ったが、観光地化したそこは物売り（DVD 等）が大勢いて、とんでもなく付きまとい「買え買え！！」であったが、絶対買ってやるものかとの思いを貫き通した。その後は一路空港へと向かい、スラバヤから気温 30 度前後のジャカルタ、そしてマイナス 2 度のソウル経由の鹿児島への旅は体温の調整が追いつかず完全に“風邪”の初期状態で 6 日目の帰国であった。



写真 1 ケルト火山の溶岩ドーム



写真 2 熟したドリアンに感激の著者